

93. 1967年の干ばつによる造林地の被害事例

長崎県総合農林センター 西 村 五 月
松 尾 俊 彦

はじめに

長崎地方は、1894年の干ばつ記録以来、74年間に8度もこの様な現象に面している。1967年の干ばつは、山地の樹木が枯死したりするなど被害が目立って著しかったと云われている。被害は県内各地の幼令林、新植地に見られたが、此処では平戸市津吉と、南高来郡千々石町上峯の10年生前後のスギ、ヒノキの調査例を述べる。これらの林分の被害は局所的に集団発生していた。

異常干天について

この両地方における異常干天の内容は、現地以最寄の観測地によれば第1表のとおりである。この様に県北部と県南部とでは、干天期にズレがある。また、この年の夏の雨量は平年のほぼ30%程度であったと考え

第1表 異常期間の内訳

	紐 差	雲 仙 公 園
期 間	7.14—9.10	8.22—10.12
日 数	56	49
降 水 量 (mm)	22	21

られた。

被害の様相

調査は1968年3月上旬、生長量(樹高と直径)を各20本宛、土壌断面調査、植栽樹の根の分布、地形等についておこなった。

平戸市の場合、スギとヒノキについて各々1林分宛を調査した。母材は何れも輝石安山岩である。生長は何れも被害区の方が悪く、土壌断面にも著しい特長的な差を認めることは出来なかった。スギの場合には、土壌の有効深度は80cm以上に達し、根の分布もほ

ぼ同様な状態であった。ヒノキ林分は有効深度60cmで、やや浅い土壌と思われる。

被害木の分布状況と地形を関連づけることによって常風の影響を強く受けていることを知った。すなわち、海岸から500~600mmの位置にあり、標高は約50mである。被害区の分布は何れも風衝的地形にあった。

千々石町の場合はヒノキ2林分を調査した。母材は安山岩である。海岸から2,500m離れた標高250m附近の位置にある。しかし、此処は海に面して開けた平地があり、その巾は約1,500mで、むしろ、中央部を流れる上峯川に風が収れんされる様な状態にある。その風が山地へ入ってすぐのこのヒノキ造林地へ吹きつける。この被害区は帯状になっており微地形に関連づけると此処は、常風の通路となっていることがよく判った。

もう一例のヒノキ林は有効深度30~40cmで土壌が浅い事による処も大きかった。何れの場合も被害区の方が生長が悪い共通点をもっていた。

ま と め

林業面からは、干害について①林地土壌が浅い場合②土壌は浅くはないが、常風にさらられていて、常に植物体又は土壌表面からの水分収だつ量が多い場合、③その複合型が考えられる。そして、一般には③のタイプがもっとも多いであろう。

この調査においても大体②、③に属している。また、1967年の干ばつは幼令林の新植地にもっとも大きな被害をもたらしたが、これについては、此処では論及出来ない。しかし県内の被害地の大部分が、この調査事例のように常風によるものは考えないが、この様なケースは意外に多いのではないかと思われる。殊に海を多く抱え込んでいる長崎県では、今後の植林に当って一考を要する問題であろう。

なお、詳しい報告を別途準備中である。